



総評

諏訪 昭宏 助教授

釜山外国語大学校ビジネス日本語学部

東日本大震災から、ちょうど1年。

「東日本大震災の復興支援に、私たちはどう向き合い、どう関わるべきか。ローカルな地域復興において、地域を越えたグローバルなネットワークの中で主体的に参加していくことが求められ、被災と復興の現場の声を聞きながら、自分たちの関わり方を内在的に議論していく」という趣旨のもと、今回の国際ジョイント・セミナー「東日本大震災の復興と私たち—ローカル／グローバルに考える」は、日本学生支援機構のショート・プログラムの支援を受けながら、お茶の水女子大学の文教育学部グローバル文化学環、グローバル教育センター、グローバル協力センター、リベラルアーツ「生活世界の安全保障」系列の主催のもと、開催されました。

海外の7大学(チェコ:カレル大学、タイ:チェンマイ大学、中国:大連理工大学、韓国:釜山外国語大学、ドイツ:ボン大学、ポーランド:ワルシャワ大学、アメリカ:ヴァッサー大学)から各大学2名ずつの計14名の学生たちとお茶の水女子大学の約50名の有志の学生たちは、3月10日から18日までの9日間の日程中、前述のテーマについて考え、語り、議論することはもちろん、交流を深め、無事全日程を終えました。以下に、詳細をまとめます。※16日から18日は自由時間であったため割愛させていただきます。

【3月10日(土)】海外の学生来日、チェックイン

海外から参加する学生たちは、いずれも学生のみで成田に到着。そこから、待ち合わせのホテルまでリムジンバスで移動。待ち合わせの場所には、来日前からメールなどで連絡を取り合っていたお茶の水女子大学の担当の学生さんが迎えに来ていて、合流。その後、宿舎まで案内してくれた。日本は初めての学生さんも何人かいたようだったが、お茶の水女子大学の学生さんの親切で丁寧な案内のおかげで安心して日本へのショートステイがスタートできたようである。一般的な留学などでは、たいてい大学の職員が対応したりするケースが多いと思うが、それに比べ、今回のように何度か連絡を取り合った同年代の日本人学生が対応してくれることは、事務的ではなく感じられるのか、より温もりを感じ学生たちも非常に嬉しそうな顔をしていたのが印象的であった。



【3月11日(日)】震災関連学外イベント参加

今回の企画の多くは、お茶の水女子大学の学生さんが主体的に取り組み、企画されたと聞いている。2日目となるこの日のイベントも、ホストとなる日本人学生が東京を案内し、互いに仲良くなる時間をとりながら、交流を進めた。午前中は、渋谷駅に集合し、お茶大生が考案したというランチをとり、しばらくの自由行動。午後は、震災に関する予備知識として、東京臨海広域防災センターを訪問し、大地震直後の状況をシュミレーションの中で体験し、どのような行動、そして防災対策が必要かを学ぶ良い時間となったようである。また、参加国においては、このように体験学習ができる施設がないということから、日本の防災意識にあらためて学ばされたようである。夕方からは、お台場海浜公園に場所を移し、“3.11を心に刻む「次世代の想像のために」～東京の夜空を照らす輝きと想い～”というイベントに参加した。レインボーブリッジの真横である花火を見ながら、会場で配られた灯籠に各々が祈りを込めてメッセージを書き海に流した。震災からちょうど1年となるこの日、海外から傍観するのではなく、日本人とともに日本で直接追悼イベントに参加できたことは、自分と日本、そして震災との関わりを深いものと感じさせ、それが学生たちのこれからの原動力にもつながる効果が得られたのではないかと感じた。

【3月12日(月)】テレビ会議(モナシュ大学)、ウェルカムパーティー

この日は、午後よりお茶の水女子大学でテレビ会議システムを利用し、オーストラリアのモナシュ大学の学生12名(内日本人留学生9名)のプレゼンテーション「日本とAUの原発の現状」「日本とAUの人の震災に対する意識の違い」を聞き、ディスカッションを行った。時間の関係上、十分なディスカッションの時間まではとれなかったが、何よりもこの時間の全ての進行は、両方の学生のみで行われ、日本語のみならず英語での発表、質疑など、これからのグローバル時代をリードしていく学生たちのたくましさを垣間見ることができた。テレビ会議終了後は、場所を移し、ウェルカムパーティーが開かれた。参加した世界8大学の学生が紹介されそれぞれ挨拶。その後は、お茶の水女子大学の学生の手作り料理を囲み、和気あいあいと交流が行われた。

【3月13日(火)】自由時間

明日の発表を控え、この日は全日自由時間となった。各々が自由に過ごす中、韓国の釜山外国語大学の学生2名は、昨日までの3日間の滞在で更に感じたことでもあったのか、事前に提出していたプレゼンを更に改善するため3時間ほど明日の準備にあてた。その後、仲良くなったお茶大の学生たちと東京観光を楽しんだようである。



【3月14日(水)】
<企画1>世界8大学合同国際学生フォーラム
「東日本大震災の復興を考える」

各国2名の学生が、それぞれの国で東日本大震災がどのように報じられ、受け止められたかを報告、地球規模の大災害に世界の若者は何ができるかを考える時間にあてられた。海外の学生は日本語で発表、お茶の水女子大学の学生は英語で発表したわけだが、どの大学も非常によく準備され、またその言語能力には感心させられたりもした。震災直後、各国ではメディアを通して日本の様子を目の当たりにし、どの学生もショックを隠せなかったという。震災直後には、どの国も、様々な形で募金活動や各種支援活動が行われ、タイの発表ではチャリティーソングが紹介され、アメリカの発表では、学生自らがピアノ演奏を行った歌がメッセージと共に流され、韓国の発表では、元従軍慰安婦のおばあさんたちが募金をする姿など、日本を必死に救おうとする国々の様子が紹介され、発表会場では涙を流しながら耳を傾ける参加者もいるほどであった。

タイの歌の歌詞に出てくる「君が痛い、僕も痛い」「君の痛みは分かるが、がんばってしか言えない」「心の力取り戻そう!」という言葉に象徴されるように、世界中の国々が今回の震災を自分のことのように悲しみ、そして、形は様々であっても日本を応援しようとしてくれていることは、参加した全ての人に十分伝わり、日本人としては感謝する気持ちが一杯になり、また、海外からの参加者は、今まで知らなかった他の国の支援などを知ることにより、更に自分たちももっと努力する必要があるのではないか、若者だからこそできることがあるのではないか、このフォーラムでできた絆を利用して何かできないものだろうか、など様々なことを考えさせられる時間となったようである。海外でただ報道を見るだけであった学生たちにとっては、何か行動に移すきっかけをつかんだ様子が伺えた。

【3月15日(木)】

この日は、2つの企画が行われた。まず午前の時間は、<企画2>セミナー「東日本大震災の現場を見て、語り、感じたこと」である。ここでは、お茶の水女子大学のグローバル文化学環「地域研究実習Ⅲ」による陸前高田市派遣学生の5つの報告が行われた。まず、陸前高田市の被災状況の概況、そして、復興支援に関わる様々なアクターについての紹介、仮設住宅・集会所・コミュニティカフェ運営などの状況、震災後の人口流出と雇用創出、参加した学生たちによる復興計画という内容の報告であった。



一般の報道では知り得ることのできない内容も多く、被災地の人たちへの接し方「問わず語り」は印象的であり、お金や物による支援だけでは解決できない「心のケア」という部分を改めて考えさせられるきっかけとなった。その後、昼食を挟み、午後は、〈企画3〉講演会「東日本大震災の被災と復興の現場から ―地域を越えて」と題して、以下の3人の講演者を迎え、被災と復興の現場の声を聞かせて頂いた。

まず、始めの講演は、安田菜津紀氏（写真家、studio AFTERMODE）による「ファインダーから見る被災地」。フォトジャーナリストとして震災にあたり、何のために何を伝えていくべきか、苦悩の中、現在に至るお話を頂戴した。前日の発表で全ての国がそうであったように、やはり私たちが得られる情報はメディアの報道によるところが多く、安田さんのようなフォトジャーナリストの方々の写真を通して、心を動かされ、支援の輪を広げているのだと思う。会場に展示された数十枚の写真は、企画終了後、各国の学生に無料で配られ、学生たちは母国へと大切そうに持ち帰っていった。震災から1年が過ぎ、海外での報道はほとんどなくなってしまったが、今後、写真などを通して、日本の復興の様子、人々の笑顔が取り戻されていく様子を知っていくことで、学生たちも自分たちの行動の意味を感じ、次の行動に移す原動力となると感じた。

震災時のリーダーシップとして必要な「大きな声、先に取らない、オープンに行う」という3要素は今回、それぞれの地域を代表してきた学生たちにとって将来活かされるであろう有益な知識であった。また、長引く支援活動において、継続することの大切さ、同じ地を訪れることによる真の交流と支援、5年後10年後であっても忘れないための仕掛けの必要性など、被災地の方々の心からの願いを代弁された。質疑では、佐藤氏のメッセージに、海外から他人事として今回の震災を見ていた自分自身の行動を恥じ、涙ながらに反省する学生や、うまく言葉に表せないががんばってもらいたいという学生の声が多く聞かれた。これまでの海外での支援活動や、現地での日本人学生の支援活動、そして、現地の声を聞く過程で、参加した学生たちは内省を繰り返し、震災を遠く離れた日本でのことと単純に考えるのではなく、グローバル社会に生きながら、いかにローカルに考えていくか、自分のこととしてどう捉えていくか、次第に変化が見られた。





最後は、松崎康弘氏(いわきいきいき食彩館委員会、いわき市農商工連携プロデューサー)による「地域の連携を通じた震災復興のあり方」という演題で講演をいただき、全体のまとめとして討論の時間がとられた。これからそれぞれが自分の国に戻り、そして何か行動に移して行きたいと新たな強い意志をもたされた中、講演者からは繰り返された言葉は、「忘れないでほしい」「いい塩梅に」「つながっていくこと」であった。一過性の支援活動ではなく、関わりを継続することの大切さ、そしてつながり続けることの意義は、まさに今回の国際ジョイント・セミナーが目指したものであり、今一度再確認されたものであった。

講演のあとは、場所を移し、フェアウェルパーティーが開催された。会の冒頭で行われた海外からの参加学生の感想では、どの学生からも国に戻って何かを始めたいとする強い気持ちが現れており、また、初めての日本滞在は、それまでの日本人のイメージをプラスに変え、母国でも日本人の親切さ、温かさを多くの人に伝えたいといった言葉や、学生でも何かできるんだという勇気・自信を得たという感想、また日本に来たいという声などが多く聞かれた。そして、半分旅行気分であった来日当初の顔は消え、どの学生たちの顔にも何かたくましさを感じさせるものがあった。この充実した数日間は確かに学生たちを変えたと言えるのではないだろうか。滞在中の日本人学生との交流により友情が芽生え、また日本・海外の学生たちの頑張りに刺激を受け、被災地の生の声を聞くという全ての過程が、綿密に関わっており、それぞれを単独に行っては決して得られることのない効果を生み出したといえる。ローカルな問題を自分の問題として捉え、それをグローバルな問題として行動に移す第1歩になったことは確かである。ここで築かれたネットワークは、それぞれの学生が帰国後の現在も、SNSなどを利用し交流は継続しており、一部の国ではグループを作り小さいながらも行動に移し始めたようである。単に友好を深めるだけの交流ではなく、世界が抱える様々な問題に直接関わり、議論をしていく中で培われた友情は固いものとなり得ることからも、今後このような国際ジョイントセミナーが多く開催されることを切に願うものである。



Chairman's Closing Remarks

FORUM2012 Conference Chairman & Founder Professor

森山 新 教授

お茶の水女子大学グローバル教育センター長

東日本大震災という未曾有の大災害からちょうど1年となる2012年3月10日、ヴァッサー大学(アメリカ)、ボン大学(ドイツ)、ワルシャワ大学(ポーランド)、カレル大学(チェコ)、チェンマイ大学(タイ)、大連理工大学(中国)、釜山外国語大学(韓国)という言葉、文化、地域が全く異なる世界7か国の7つの大学から14名の学生が被災地日本に結集した。これらの大学は日頃、TV会議などを通して仮想空間上で様々なテーマについて語り合ってきた大学であったが、今回初めて日本に集まり、直接語り合い、経験をともにする場を持つことができた。かつ東日本の被災地からは津波、福島原発の被災者の代表、それをカメラに収め続けてきたジャーナリストをお招きし、さらに被災地においてボランティアを行った本学の学生も一堂に会し、今回の国際学生フォーラムは実施された。世界各地から学生を集めることは、様々に考え方が異なり、一つにまとめていくことは様々な苦勞を伴ったが、終わってみるとその多様性は、逆に大きな成果となり、国境を越えた大きな輪となった。

海外の学生はそれぞれ自分の国でどのような復興支援が行われたか、自身はどのような支援に参加したか、などについて報告をし、被災者代表をはじめ、私や日本の学生たち、被災者の人々を大いに勇気づけた。かつて日本の犠牲となった韓国、中国からの学生は来日前、過去の歴史とのはざまに苦しんでいたが、来日し、被災者の声を耳にする中で、そのような過去の恨みや悲しみを越えて支援の輪に積極的に加わった。また海外から集まった学生は、被災者やボランティア学生の報告を耳に、日本を襲った大災害のすさまじさとその犠牲の大きさを再認識し、それを携え、自国の人たちにそれを伝えんと自国に向け再び旅立っていった。

今回のように涙なくして参加することができないフォーラムは私自身いまだ経験したことがなかった。それは今回の災害の大きさを物語るとともに、そのような悲しみ、痛みを越え、国を越えて一つになり、前に進もうと心をつにすることとなった今回のフォーラムの意義を物語っていたと言える。

今回は、海外の学生を迎えるために、本学の学生50名が自ら立ち上がり、様々な形でフォーラムの成功に積極的に協力してくれた。この姿勢はまた、内向き志向、引っ込み思案がささやかれてきた日本のこれまでの心の壁を打ち破り立ち上がった若き思いであり、グローバル時代に求められる若者の姿として、頼もしさも感じた。その心たちにはもはや国境というものではなく、たとえ世界のどこで何が起きようとも、今回集まった学生は心をつにして集ってくれるであろうことを確信した。全体を振り返るとこれほど充実感を残し、開催の意義を感じながら終えることができたフォーラムは経験したことがないといってよい。開催中に何度か地震に見舞われ、14名の学生を預かる私たちをひやっとさせたが、終わってみると何一つ事故もなく、成功裏に終えることができ、心から喜んでいる。来年またこのフォーラムの開催が決まっている。このフォーラムで培われた国境なき若き力がさらに大きく、深く、熱くなることを心から祈ってやまない。

世界8大学合同国際学生フォーラム 報告書²⁰¹¹

発行日 2012年7月 2日

発行 お茶の水女子大学グローバル教育センター
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
Tel: 03 - 5978 - 5913

編集 森山 新 (グローバル教育センター長)
越智 貴子 (同上、アソシエイト・フェロー)

印刷・製本 よしみ工産株式会社